

未完^{みかん}の蹄跡^{きせき}

みわ

受賞のことば
栄えある優駿エッセイ賞の佳作に選んでいただき、深く感謝申し上げます。私が綴った馬への想いが、選考委員の方々に届いたこと、大変光栄に思います。この文章は、私一人で書いたものではありません。日頃から感動を与えてくれる全ての馬たち、そして競馬に関わる全ての人たちへ、心からの感謝を捧げます。今後とも精進してまいります。

プロフィール
出身は北海道、埼玉県で育ち。父の影響で馬と競馬に興味を持ちました。いまは地元の北海道在住、徒歩圏内に競馬場があります。競馬場で催されるイベントへ参加するのも大好きです。

北海道鹿追町にある神田日勝記念美術館を訪れたのは、何気ない週末のことだった。札幌の自宅から車を走らせ、広大な十勝平野を横目に美術館へ向かった。私は特に日勝の作品に詳しいわけではなかったが、友人に勧められて一度行ってみようと思っていたのだ。

静かな展示室を進んでいくうちに、ある一点の絵の前で足が止まった。それは、馬の絵だった。正確には、半分しか描かれていない、未完成の馬の絵。タイトルは『馬（絶筆・未完）』と記されていた。しかし、私には『半分の馬』とも呼ぶべき作品に見えた。荒々しい筆致で、生きているかのように力強い馬の上半身。しかし、その下半身は途中で途切れていて、未だ描かれていない真っ白なキャンバスが広がっている。その衝撃は、言葉に言い表せないほどだった。まるで、私の心の中にある、ずっと蓋をしていた記憶を、誰かに無理やりこじ開けられたような感覚。それは、

幼い頃に亡くなった父と、馬という存在に対する、私の忘れかけていた想いを呼び覚ますものだった。

札幌の実家の近くには、競馬場があった。週末になると、その周辺は独特の熱気に包まれていた。幼い私には、彼らが何をしているのか、よく分からなかった。しかし、私にとって馬は、その競馬場の、遠くから聞こえてくる蹄の音と、父の笑顔とセットになった、温かい記憶だった。父は競馬にのめり込むタイプではなかった。それは、父にとっての「ささやかな、しかし確固たる週末の楽しみ」だった。毎週土曜の夜になると、決まってリビングでスポーツ新聞を広げ、お気に入りの万年筆を片手に競馬欄を眺めていた。家族団らんの邪魔になることはなく、むしろその穏やかな時間が、我が家の週末の始まりを告げる合図のようだった。

私が小学校に上がるか上がらないかの頃、父は私を初めて競馬場へと連れて行ってくれた。スタ

ンドの席に座り、目の前を駆け抜けていく馬の群れを見たときの興奮は、今でも忘れられない。轟くような蹄の音、騎手の叫び声、観客たちの地鳴りのような歓声。それは、テレビで見えていたものとは全く違う、圧倒的な迫力だった。父は私を膝に乗せ、「あの馬が、お父さんの本命だ」と、指さして教えてくれた。馬券はごく少額、たった数百円を、お小遣い程度の楽しみとして買うだけだった。勝ったとしても大喜びするわけではなく、「いい走りだったな」と静かに微笑むだけ。その日の私は、父が買った馬券の勝ち負けは覚えていない。ただ、父と二人で見た、力強く走る馬の背中が、私の目に焼き付いている。

その後、私が成長するにつれ、父と競馬の話をすることは少なくなっていく。思春期になり、私の興味は友人との遊びや学校生活へと向いていった。父は相変わらず、生活の一部として競馬をたしなんでいたようだが、私にとっては、それは



もう、遠い昔の記憶の一部になっていた。しかし、私にとって馬はやはり父の象徴だった。テレビで競馬中継が流れてくると、私は父が楽しそうにしている姿を思い出した。競馬新聞を広げながら、万年筆の先を舐めては印をつけていた、あの優しい横顔。そんな些細な仕事まで、今でも不思議なほど覚えている。

私が24歳の時、父は突然この世を去った。朝、出勤しようと身支度を整えていた父が突然倒れたのだ。病院に運ばれたが、手の施しようがなかった。あまりにも突然の別れに、私はただ呆然とするしかなかった。その時、真っ先に私の頭に浮かんだのは、父と二人で見た競馬場の馬の姿だった。あの時、父が指さした馬が、ゴールまで力強く走り切ったのか、途中で失速してしまったのか、私にはもう知るすべはない。ただ、父の人生もまた、突然終わってしまった、未完のレースのようだった。

父が亡くなってから、私は馬という存在を意識的に避けるようになった。それは、父の記憶とあまりにも強く結びついていただけ。見るたびに、父の不在を突きつけられるようで、辛かった。だから、神田日勝の『半分の馬』を初めて見たときの衝撃は、それまでの感情を全て覆すものだったのだ。描きかけの馬。それは、父の突然の死と、その後に続くはずだった父との人生の断絶を、あ

まりにも正確に言い当てているように思えた。

ある日、実家に帰省した私は、父が使っていた机の引き出しを開けてみた。中には父がつけていた小さな競馬予想ノートがあった。丁寧に競馬新聞の切り抜きが貼られ、鉛筆で印がつけられている。勝った馬には二重丸、惜しくも負けた馬には三角。その日付は、父が亡くなる直前まで記されていた。最後のページには「今週こそ、」とだけ書かれていた。続きはなかった。その文字は、まるで父が私に語りかけているように思えた。父にとって競馬は、ただの賭け事ではなく、ささやかな未来への期待だったのだ。週末を、次のレースを、そしてその先に続く人生を、静かに楽しみにしていた。そのノートを握りしめながら、私は父がどれほど静かに人生を愛し、私たち家族との時間を大切にしていたのかを、痛いほど理解した。

父の死から年月が経ち、私は再び競馬場を訪れる決心をした。一人で、あの時のスタンドへ向かった。幼い頃、父に連れられて行ったあの日から、一度も足を踏み入れていなかった場所だ。スタンドに座り、レースを待つ間、私は父との思い出を反芻した。轟く蹄の音、地鳴りのような歓声、そして、私の膝を優しく叩く父の手。年月が経っても、その思い出は色褪せることなく、より鮮明に、温かく私の心に蘇ってきた。

スタートのゲートが開く。一斉に飛び出す馬の

群れ。彼らは、ただ勝利を目指して懸命に走っている。その姿は私にとって、もはや「父の不在」を象徴するものではなかった。むしろ、父が生きていた証、父が愛した人生そのものだった。父は、この景色の中に、確かに生きていたのだ。走り切る馬の背中に、父の笑顔を見た。騎手の真剣な眼差しの中に、未来を夢見ていた父の希望を見た。歓声を上げる観客の中に、ささやかな週末の楽しみを大切にしていた父の姿を見た。

神田日勝の『馬（絶筆・未完）』は、私にとって、もはや悲劇の象徴ではない。それは、未完成のままで終わってしまった人生に、それでもなお可能性と希望が秘められていることを教えてくれる絵だ。あの白いキャンバスには、父の夢、父との思い出、そしてこれから私が生きていく未来が描かれているのだ。父の人生は、途中で終わってしまったのかもしれない。しかしその記憶と愛情は、決して途切れてはいない。それは、私の心の中で、力強く走り続けている。

父が愛した馬たちは、私にとって、父の存在を教えてくれる大切な存在になった。悲しみを乗り越え、私は今、馬を見るたびに、もう二度と会えない父を想い、温かい気持ちで満たされる。そして今日私は、目の前にある未完成の人生を、力強く、そして穏やかに走り続けていく。